

第6学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「場面に応じた言葉づかい」

2 単元の目標

相手と場面に合う日常の敬語を捉え、言葉を使う場面で役立てる。場面・相手・選んだ言い方の記録に自分の判断と理由を表す。友達の応答や自分の記録を基に、言葉の捉え方や表し方を見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①相手と場面に合う日常の敬語を理解し、学習で扱った語句や例を示して説明している。（〔知識及び技能〕(1)キ）	①「書くこと」において、学校でよくある依頼や応答を教師作成の場面で比べ、相手との関係に応じた言い方を試している。（B(1)オ）	①見通しをもって言葉や表現を検討し、交流で気付いた点を基に、自分の読み方や表し方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

（1）単元について

この単元では、相手と場面に合う日常の敬語を中心に学ぶ。学校でよくある依頼や応答を教師作成の場面で比べ、相手との関係に応じた言い方を試す活動を組むことで、言葉について知ることと、目的に合わせて使うことを結び付ける。指導要領の〔知識及び技能〕(1)キとB(1)オに関係する学習である。公式単元一覧では知識事項が中心であるが、本案では言葉を使って見直す活動に関わるB(1)オを関連事項として加えた。成果は、作業が終わったかのほかに、場面・相手・選んだ言い方の記録にどんな判断の理由が残るかで捉える。

（2）児童について

（学級の子どもの様子を先生が書く）

（3）指導について

予想される難しさは、敬語を重ねるほどよいと思うことである。誰の動作を述べるかを確かめ、過剰な表現を避けて自然な用例と比べさせる。初めの答えを消さずに残し、学習後に何を変えたか、なぜ残したかを比較できるようにする。児童の反応は予想で、実在の学級の姿を示すものではない。読む速さや記述量の差を、そのまま国語の力の差として扱わない。

5 指導と評価の計画（全2時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1 （本 時）	○学校でよくある依頼や応答を教師作成の場面で比べ、相手との関係に応じた言い方を試す。 ○丁寧であれば、どんな言い方でも相手に自然に伝わりますかを考え、最初の答えとその理由を残す。	知①・思①（発言・学習記録）
第2次	2	○友達の説明と比べ、場面・相手・選んだ言い方の記録を見直す。 ○別の語句や場面でも今回の考え方を使い、直した理由を伝える。	思①・態①（見直しの記録）



6 本時の指導 (1/2)

(1) 本時の目標

相手と場面に合う日常の敬語について、例や資料を根拠にした自分の考えを場面・相手・選んだ言い方の記録へ表すことができる。

(2) 学習過程

段階	学習活動 (○主な発問) ・予想される児童の反応	指導上の留意点 (◎評価)
導入 (分)	1 身近な経験と既習の言葉を確認、今日使う教材や資料を準備する。 ○「丁寧であれば、どんな言い方でも相手に自然に伝わりますか」 【めあて】相手と場面に合う日常の敬語について、自分の考えと理由を表そう。 〈予想される児童の反応〉 ・相手の行動と自分の行動で、言い方の選び方が変わる。 ・初めの見方では決められない箇所もあり、例を比べてみたい。	本時に使う具体例が見える所へ置く。敬語を重ねるほどよいと思う姿が見られても、すぐに訂正せず、どの言葉や経験からそう判断したかを聞き取る。
展開 (分)	2 学校でよくある依頼や応答を教師作成の場面で比べ、相手との関係に応じた言い方を試す。 3 場面・相手・選んだ言い方の記録の下書きや途中の記録を示し、考えた理由を説明する。 ○「丁寧であれば、どんな言い方でも相手に自然に伝わりますか」 4 聞き手は、説明に使われた語句や資料を示して質問する。答えが異なる所は、意味や条件を調べてもう一度表す。 〈予想される児童の反応〉 ・相手の行動と自分の行動で、言い方の選び方が変わる。 ・最初はそう考えたが、別の例と比べると直したいところが見つかった。	誰の動作を述べるかを確認、過剰な表現を避けて自然な用例と比べさせる。説明が難しい児童には、対象の語句を選ぶ、線や矢印で関係を示す、口で説明するという方法も用意する。書く量を減らす場合も、本時に考える言葉の関係は残す。早くできた児童には、同じ説明が通らない場合や、他の言い方の可能性を考えさせる。 ◎思① 学校でよくある依頼や応答を教師作成の場面で比べ、相手との関係に応じた言い方を試している。(途中の記録・説明)
まとめ (分)	5 場面・相手・選んだ言い方の記録へ、本時の判断と理由、見直した箇所を記す。 【まとめ】相手の行動と自分の行動で、言い方の選び方が変わる。 6 初めの答えとの違い、または理由を確認して残した点を振り返る。 〈予想される児童の反応〉 ・相手と場面に合う日常の敬語を、別の場面でも意識して使いたい。	結論が教師の例と同じかだけで判定しない。丁寧であれば、どんな言い方でも相手に自然に伝わりますかへの答えに、語句や事実を示した説明があるかを見る。課題が残る場合は、次の関連学習でも同じ観点で記録を集める。 ◎知① (語句や関係の説明) ・態① (見直しの理由。単元を通した記録と合わせる)

（３）本時の評価

おおむね満足できる状況は、場面・相手・選んだ言い方の記録で、本時に選んだ語句や説明の理由を表している姿とする。敬語を重ねるほどよいと思う場合は、誰の動作を述べるかを確かめ、過剰な表現を避けて自然な用例と比べさせる。発表の回数や作品の飾り方は評価の根拠にしない。

（４）板書計画（縦書き・右から左へ）

縦書きで右から左へ構成する。右端に単元名と本時の問い。その左に、児童が最初に出した考えと比較する例を置く。中央には相手と場面に合う日常の敬語を確かめる語句や関係を並べ、線や矢印で根拠と判断を結ぶ。左側に場面・相手・選んだ言い方の記録で残す項目と見直しの理由を置く。左端は本時に確かめたこととその後を使う場面の記録にする。教科書の台詞や文章はこの配布物へ複製しない。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

